

小学校 第4学年 国語科 学習指導案

北海道幌延町立幌延小学校
教諭 石戸谷 和利

単元名 言葉の文化① 『短歌の世界』（4時間）

単元のねらい 言葉に着目しながら情景や心情を思い浮かべたり、言葉の響きやリズムを感じ音読や暗唱をしたりしながら、易しい文語調の短歌に親しむことができる。

本時のねらい 4つの短歌を音読したり、解説文を読んだりしながら、言葉に着目して短歌に描かれた情景や心情を想像することができる。（第2時）

指導時期 6月

指導者用デジタル教科書（教材）活用の意図・目的

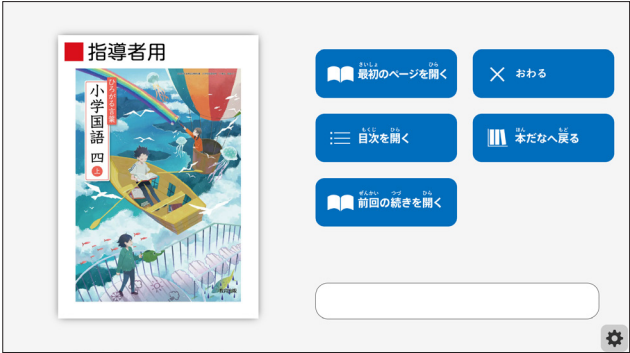
本単元のねらいは、易しい文語調で書かれた短歌に慣れ親しむことである。特に、言葉の響きやリズム、三十一音という短い言葉の中で情景や心情を描く短歌のすばらしさ、その作品を生み出した作者たちに関心をもてるよう授業を行いたい。

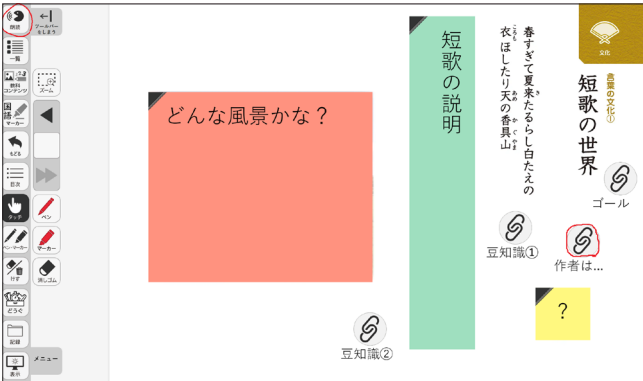
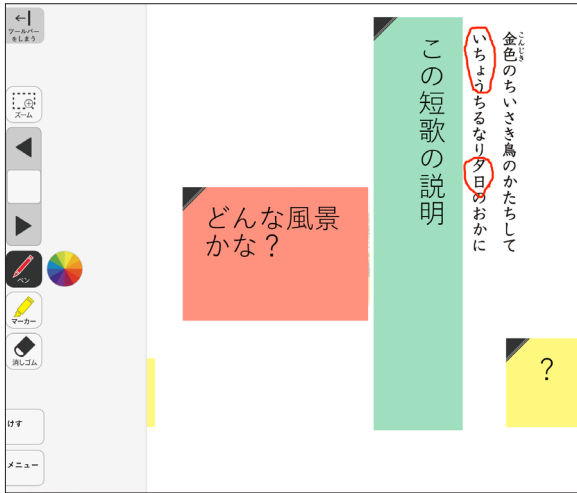
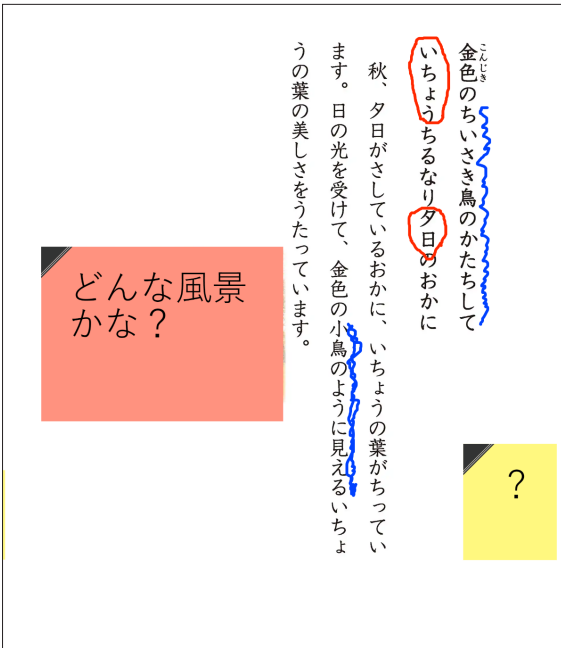
紙の教科書を使った授業では、短歌をイメージする写真や解説文が既に児童に見えるかたちで掲載されており、言葉に着目して情景や心情を想像するのが難しいことがあった。「指導者用デジタル教科書（教材）」では、各短歌の写真や解説文を隠すことができ、効果的なタイミングで提示することができる。

また、「指導者用デジタル教科書（教材）」の「朗読」は、短歌の言葉の響きやリズムを何度も感じながら音読・暗唱をしていく学習活動に有効であると考えられる。さらに、「どうぐ」にある「リンク」を活用することで、短歌の作者についての豆知識など、教科書の内容と関連する資料を提示することができ、短歌の世界への親しみを深めることに役立つと考えられる。

以上のように、紙の教科書以上に児童が短歌の世界に関して、言葉に着目しながら慣れ親しむことができると考え、本単元において「指導者用デジタル教科書（教材）」を活用した。

本時（第2時）の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	「指導者用デジタル教科書（教材）」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 本時で扱う4つの短歌を提示し、作者についてミニクイズ形式で紹介していく。 ①：この短歌は、誰が詠んだと思いますか。 ②：藤原敏行は秋の歌が得意って書いてあるから、この短歌かな。	 「リンク」朗読の活用 事前に用意しておいた4つの短歌の作者紹介に関わる「リンク」の資料を提示する。本時で扱う短歌とともに作者の人物像なども提示しながら伝えていく。

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	● 4つの短歌を音読する。 ● 教科書に掲載されている4つの情景の写真を黒板に掲示し、本時のめあてを提示していく。 ■：言葉に注目し、短歌でどんな情景がよまれているか想像して考えてみよう。	● 「朗読」で言葉の響きやリズムについて確認する。 ● 「朗読」に合わせ、音読の練習を行っていく。 
展開	短歌の言葉に着目し、4つの短歌がそれぞれの写真の情景を詠んだものかを考える。 ◎：「夕ぐれ」という言葉があるから…… ◎：「香具山」とってなんだろう。調べてみよう。 それぞれの短歌で着目した言葉と、どの写真の情景を詠んだものかについて考えを交流する。 ◎：「夕日」という言葉に注目したけど、夕方の写真が2つあるな。どっちだろう。 ◎：夏と白という言葉に注目して……	「ふせん」「ペン」の活用 ● 短歌以外の情報を「ふせん」で隠し、言葉から情景を想像させていく。 ● 「ペン」を活用し、児童が着目した言葉に印を入れていく。 
まとめ	それぞれの短歌の解説文を児童と一緒に確認し、それぞれの短歌で描かれている情景や心情を捉える。 ■：解説文を読んで気づいたことはあるかな。 ◎：この言葉は、こんな意味や気持ちを表していたのか。 ◎：短い言葉で、いろいろなことを伝えているんだね。短歌っておもしろいな。 ● 4つの短歌の情景を、短歌の言葉に着目したり解説文を見たりして想像を深めた学びを振り返り、本時の学びでの気づきや、次時や家庭学習で学んでいきたいことなどを記述していく。 ◎：家庭学習で自分でも短歌を作りたいな。	「ふせん」「ペン」の活用 ● 解説文の「ふせん」を取り、短歌の言葉だけでは気づかなかった新たな情景に関わる気づきの部分について、「ペン」を活用して印を入れ、書き込みを行う。 

指導者用デジタル教科書（教材）を活用したことで得られた効果

【指導者側が得られる効果 / メリット】

今日の国語の授業づくりにおいては、言語活動を通じて児童一人一人の「言葉への自覚」の向上を図っていくことや、子どもが主体的に学ぶことのできる授業への転換が求められている。その一方で、教員の働き方改革の推進も同時に求められている。

本時においては、「指導者用デジタル教科書（教材）」の「ふせん」を活用して「解説文」や「短歌をイメージする写真」を隠し、短歌の言葉から情景をイメージしていくという実践を行った。短歌以外の情報を隠していくことで、短歌に示されている「言葉」から情景や心情について考えていくという授業を行うことができる。また、児童の思考の流れや授業の状況など、適切なタイミングで解説文や写真を提示することも「ふせん」で隠すことのメリットである。さらに、「指導者用デジタル教科書（教材）」に掲載されている教材文と「ふせん」のみで子どもが主体的に学ぶことのできる授業へ向けた教材を作成していくことができるため、教員の働き方改革につながることも「指導者用デジタル教科書（教材）」を活用して得られる効果だと考えられる。

本実践では、「ふせん」のほかにも「ペン」を活用した。子どもが主体的に学ぶことのできる授業づくりにおいては、児童の学びの足跡（学習ログ）をもとにしながら授業づくりを行っていくことが大切である。「ペン」は、授業で行った児童とのやりとりや発言を、教科書上に書き込んだり記録として残しておいたりすることができるため、過去の授業の記録をもとにしながら児童の実態に応じた授業づくりを行うことができるという効果があると考えられる。

【学習者側に与える効果 / メリット】

現在の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」を子どもたち自身が獲得し、自立的学習者としての資質・能力の向上を図っていくことが求められている。そのための手段として、個別最適な学び・協働的な学びという学び方が示されているが、その中に児童自身の興味・関心に応じて学びを調整する学び方（学びの個性化）というものがある。

本実践においては、「指導者用デジタル教科書（教材）」の「リンク」を活用し、扱う短歌の作者についてクイズ形式で紹介を行うという実践を行った。単元や授業の導入において、このような豆知識を児童に伝えていくことで、授業に対する興味・関心を引き出すだけでなく、家庭学習において自分自身が気になった作者や、その作者のほかの作品を調べるなど、学習の個性化につながる「学ぶ力」の向上を図る効果があると考えられる。また、「指導者用デジタル教科書（教材）」の活用を継続していくことにより、自立的に学んでいく力を培っていくこともできると考えられる。

本実践においては「リンク」の他に、短歌の音読練習において「朗読」を活用した。短歌を読むときのリズムや扱われている言葉を捉えることが難しく、音読が難しいと感じる児童もいることが予想できる。「朗読」を活用すれば、読む速さを変更することができる。音読の練習の際に、うまくリズムを捉えられていない様子が見られた場合、「朗読」の速さを遅くすることで読むときの切れ目が把握しやすくなり、国語に苦手意識がある児童も安心して授業に参加できるという効果もあると考える。